研 究 結 果 報 告 書

所属　武漢大学
役職　講師
氏名　石 暘暘

研究結果

近現代日本語における外来語受容の二層

本論は、量的な側面と質的な側面において、明治から現代までの外来語が用いられる資料を検討し、従来の外来語史研究において十分に明らかにされてこなかった抽象的な外来語の変化の実態を重点的に調べることで、近現代における外来語の増加及び受容の一面を把握し、日本における外来語史の一端を明らかにした。それにあたっては、従来の外来語史の時代区分をあらためて考え、外来語史の日本語語彙史上への位置づけも試みた。その結果は、次のようになる。

①近現代日本語における外来語受容の二層

まず、抽象的な外来語受容の増加過程には、少なくとも 2 種類があった。一つは、「センス」「システム」のような、日本語内で自然に増加するというタイプである。もう一つは、「ポイント」「イメージ」「パターン」のような、原語からの再借用で急増するタイプである。一方、この 2 種類の増加過程を外来語借用の観点から考え、そこには、少なくとも以下の2 種類の受容の仕方があり、しかもそれらが重層的になっていることを明らかにした。

(a)類 専門用語として限られた範囲で受容するという受容の仕方

(b)類 比較的広い範囲にわたった一般語として受容して、大量に使用するという受容の仕方

このような受容の 2 種類が存在しているため、外来語増加には、緩い趨勢で増加する(a)層と急激に増加する(b)層、という外来語受容の二層が生まれたことも明らかになった。特に、(b)層の増加は、20 世紀後半に起こった外来語の急増の一要因と捉えた。

②日本語語彙史上の新しい画期―1960・70 年代

従来の外来語史の時代区分を検討し、近現代外来語史を「19 世紀末・20 世紀初」（「専門用語の借用時代」）、「1960・70 年代」（「一般概念の借用時代」）、「20 世紀末・21 世紀初」（「日本語化の時代」）という三つの時代に分けた。特に、「1960・70 年代」を区切りとして、日本語における外来語借用の仕方が変化し、外来語の使用は質も量も極めて重要な転機を迎えたことからすると、1960・70 年代に起こった外来語使用の急増は、日本語語彙史上の大きな画期であると捉えた。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）
論文　（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等） 石暘暘（2023）「日本語における外来語「インプット」の受容過程」『国語学研究』62号，44－56，「国語学研究」刊行会　（2023年7月内印刷予定，最終校正済み） 石暘暘（2023）「近現代日本語における外来語の再借用現象」『文芸研究』第191集，日本文芸研究会　（2023年4月採用済み，校正ゲラ待ち）
書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）